

郷土誌の掲載コンテンツからみる 地域イメージの把握に関する研究 —「郷土文化誌 郡上」を対象として—

橋本 優華¹・佐々木 葉²

¹非会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保三丁目4-1 51号館16階02教室)
E-mail:yandh.0611@asagi.waseda.jp

²正会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保三丁目4-1 51号館16階02教室)
E-mail:yoh@waseda.jp

特定の地域において編纂されたテキストである郷土誌には、地域の特性および人々に認識された地域像が反映されていると考えられる。そのため、郷土誌の構成内容の分析から、その地に暮らす人々が抱く地域イメージの種別・様態を読み取ることが出来る。

本研究では、岐阜県郡上市八幡町において住民によって編集、発刊された『郷土文化誌 郡上』全10巻を対象として分析を行い、掲載コンテンツのカテゴリーから郷土誌の構成を把握し、さらに文芸作品として表現されたテキストから地域イメージを抽出し、その特徴を明らかにした。

Key Words : Gujo Hachiman, Kyodo bunkashi, regional image, text mining

1. はじめに

(1) 研究の背景

私たちの暮らす世界は、土地に固有の山河を土台に人間が生活を営んできた集積の上に成立しており、中村は『都市をつくる風景』¹⁾において、そのような世界をトポス（場所）と呼び、トポスと身体を繋ぐものとしての風景の重要性を挙げている。つまり、風景とは主体と環境の関係性から規定されるものであり、眼前に現れる風景は、無限に知覚される眺めから特定の眺めを意識的に取り出された状態である。そのような、個人によって発見された風景は多くの表現手段を用いて他人に共有され、あるものは共通の「見方」として集団の風景となる。風景として対象化しておらずただ無意識に眺めている状態から風景として意識される状態、さらに共通の見方として集団の風景となる状態へと次元が移行する際の重要なファクターの一つとして、地域文化がある。特定の地域において編纂されたテキストである郷土誌には、地域の特性および人々に認識された地域像が反映されていると考えられる。そのため、地域文化を記述した郷土誌の構成内容の分析から、

その地に暮らす人々が抱く地域イメージの種別・様態を読み取ることが出来ると考えられる。

(2) 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では岐阜県郡上市八幡町において住民によって編集、発刊された「郷土文化誌 郡上」を分析対象とし、文芸作品として表現されたテキストから郡上八幡町の地域像を抽出し、その特色を明らかにすることを目的とする。

(3) 研究の位置づけ

地域研究において、テキストから地域を捉えようとする試みは数多くなされ、その中で様々な手法が模索され、展開されている。

池田²⁾³⁾は、高山を対象に書かれた複数作品を対象としてイメージ画や景観要素の位置図から地域らしさを表現する地域イメージを抽出し論じた。吉本⁴⁾は都市協会発行の機関雑誌から地域・都市施設・時代の記述を分析することで、近代大阪の都市認識を論じた。

このようにテキスト中の描写から地域景観を抽出・記述し共通の見方をあぶりだそうとする一方で、尾野

の研究⁵⁾⁶⁾に代表されるような、テキスト中におけるくらしの描写・心情描写から自己の内面と風景認識過程の相互的な関係性を記述するものもある。

本研究では、郷土誌という資料を用いた地域イメージの記述を目的とすることから前者の研究に位置づけられると考える。

2. 対象地の概要

岐阜県郡上市八幡町（以下、郡上八幡）は、2004年に八幡町を含む郡上郡の7町村が合併してできた郡上市のほぼ中央に位置し、2008年10月1日現在で、人口15,535人、面積242.31km²である。東西及び北の三方を山に囲まれ、市街地を南北に長良川、東西に吉田川が走る。郡上八幡は1559年東殿山の戦いで東氏を滅ぼした遠藤盛数が郡上八幡に八幡城を築城したことから現在の市街地に城下町が形成され、飛騨・越前・加賀を結ぶ交通の要所として発展した。また、岐阜県・福井県・石川県をまたがる白山を仰ぐ白山信仰の成立による白山文化、中世の武家歌人東氏により築かれた文化は郡上八幡の地理的条件も重なり、郡上八幡独自の文化として根付いていった。

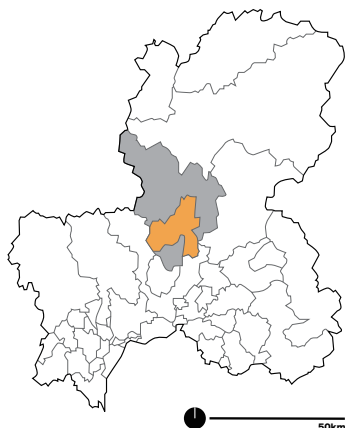


図-1 郡上市及び八幡町の位置

3. 「郷土文化誌 郡上」の概要と分析対象

(1) 「郷土文化誌 郡上」の概要

「郷土文化誌 郡上」は、詩や連句、暮らしのフォトグラフ、郷土史研究、随筆等が掲載された文芸集であり、1971年から1999年までの28年間で10冊刊行されている。本町にて郡上紬を扱う呉服店を営む谷沢幸男（1931-2003）が編集長を務め、詩人の水野隆（1937-2009）や郡上北高校の教師であった高田英太郎（1931-2005）、画家の水野政雄（1938- ）など八幡町にて生活する人々が編集に携わった。基本的な販売方法としては、希望者に個人的に販売したり、郡上市内の本屋や、

編集者の経営する店舗（おもだか家や喫茶「門」）にて販売された。最終巻である10巻は、郡上郡高鷲村（現 郡上市高鷲町）特集だったこともあり、高鷲村には全戸配布された。

表-1 「郷土文化誌 郡上」の刊行年
(※第5・6号は合併号である)



図-2 「郷土文化誌 郡上」第5巻表紙

巻数	刊行年月日	総ページ数
1	1971/11/1	131
2	1972/8/1	176
3	1973/8/10	266
4	1974/11/1	274
5・6	1976/6/30	355
7	1979/7/15	397
8	1981/8/13	380
9	1986/8/12	516
10	1991/11/15	474

(2) 「郷土文化誌 郡上」の構成

「郷土文化誌 郡上」全10巻を用いて、コンテンツ毎に筆者・題名・内容を読み取り、1つのコンテンツに対して表-2に示す30種類のラベルの内のいずれかを付与し、それら30種類のラベルを9つのカテゴリーに沿って分類した。表-2に各々の種別とカテゴリーを示す。

表-2 コンテンツの種別とカテゴリー

文芸	小説	くらし	民俗学
	随筆		民話
	回顧録		民謡
	伝記		論考
	紀行		写真
	日記		絵
	短歌		その他
	詩	自然地理	自然地理
	俳句	郷土史	歴史
	連句		地名学
	川柳		論考
	漢詩		写真
	戯曲		絵
	書評	ルポ	ルポ
	劇評	ニュース	ニュース
	論考	インタビュー	インタビュー
	書	広告	広告
	その他	その他	その他

表-2 にしたがって分類し、巻数毎に整理した結果を図-3、詳細な結果を表-3に示す。

図-3 には各巻ごとのコンテンツの種別の内訳を示している。全巻を通じて、くらし・文芸・郷土史は一定の割合を占めており、その中でも文芸の占める割合は常に高く、表-3 の内訳に示す通り、文芸の中でも随筆・短歌・俳句が高い割合を示す。

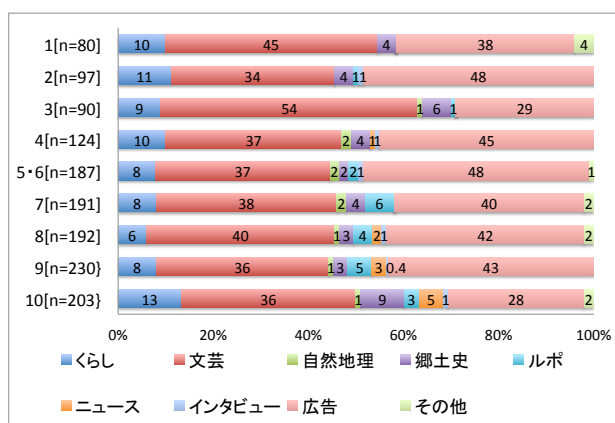


図-3「郷土文化誌 郡上」コンテンツのカテゴリー内訳

表-3「郷土文化誌 郡上」コンテンツのカテゴリー内訳詳細

カテゴリー	種別	巻数									
		1	2	3	4	5・6	7	8	9	10	
暮らし	民俗学	3	5	4	9	8	8	3	10	9	
	民話	0	1	1	1	1	1	1	3	2	
	民謡	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
	論考	0	0	0	1	1	0	1	1	2	
	写真	3	2	2	1	3	3	3	3	7	
	絵	1	3	1	1	1	0	1	0	0	
	その他	0	0	0	0	1	3	2	1	7	
文芸	小説	1	2	2	3	4	2	1	2	1	
	随筆	7	9	16	13	18	26	18	22	13	
	回顧録	0	3	1	2	12	4	8	3	19	
	伝記	0	0	0	1	1	0	1	1	2	
	紀行	0	0	1	0	1	1	0	2	2	
	日記	0	0	0	0	0	1	0	2	0	
	短歌	7	7	10	10	13	12	17	15	8	
	詩	4	5	6	8	5	4	11	8	2	
	俳句	10	4	5	5	7	8	12	10	11	
	連句	0	0	3	2	2	2	2	3	4	
	川柳	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
	漢詩	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	戯曲	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
	書評	3	0	1	0	4	7	4	4	3	
	劇評	0	0	0	0	0	1	0	1	4	
	論考	1	2	2	1	0	2	1	3	0	
	書	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	その他	1	0	0	0	1	2	1	5	0	
自然地理	自然地理	0	0	1	2	3	3	2	3	2	
郷土史	歴史	2	3	1	3	3	3	3	7	14	
	地名学	1	0	0	0	1	1	1	0	1	
	論考	0	0	2	0	0	2	1	0	3	
	写真	0	0	1	1	0	1	0	0	0	
ルポ	ルポ	0	1	1	1	0	0	0	0	0	
	ルポ	0	1	1	0	3	11	7	11	7	
ニュース	ニュース	0	0	0	1	0	1	4	8	11	
インタビュー	インタビュー	0	1	0	1	2	0	2	1	3	
広告	広告	30	47	26	56	89	77	81	100	57	
その他	その他	3	0	0	0	2	3	3	0	5	
合計		80	97	90	124	187	191	192	230	203	

その他特筆すべき点として、詩では「水野隆詩のサロン」、連句では「奥美濃連句会」主催の連句会や、連句会ならびに水野隆が中心となった一年に一度の「連句フェスタ宗祇水」が行われており、「郷土文化誌 郡上」の中にもそれらのイベントがきっかけとなり寄稿された詩や、奉納された連句が紹介されている。また、「郷土文化誌 郡上」のメンバーが大寄席会を

長年にわたって開催したり、劇評という要素が示すように、演劇活動の高まりを受け「劇団ともしび」という演劇集団が町民を中心として 1958 年に結成されたりするなど、八幡町の文芸文化は幅が広く、「郷土文化誌 郡上」が刊行されていた時期に精力的な活動が行われていたことがわかる。

「郷土文化誌 郡上」では、7 巻で大和村、8 巻に白鳥町、10 巻に高鷲村の特集が組まれ、各々の巻では、特集された町村の俳句会や短歌会の作品が寄稿されており、八幡町のみならず隣接する大和村や高鷲村からの寄稿も多く、郡上市全体としての文化の円熟が伺える。

(3) 分析対象の選定

以上の特色を有する「郷土文化誌 郡上」から、郡上八幡について書かれた随筆を対象としてテキストの分析を行う。随筆を分析対象とする理由は、筆者の体験に基づいて描かれた作品であり、郡上八幡での景観体験がテキストに反映されて、主体の心象との眺めや環境との関係をみる事が可能であると考えたためである。

分析対象作品の概要を以下の表-4 に示す。表-4 に示す通り、作者の属性としては居住者（現在過去含め）・旅行者に分類される。随筆を分析対象としているため、作中の主人公属性は筆者と重なる。

表-4 分析対象作品概要

刊行年	巻数	作品No.	作品タイトル	作者	作者属性	文数
1973年	3巻	1	一年半	亀井邦明	居住経験有	46
		2	二つ目のペレー	石田武郎	居住経験有	34
		3	二季	坂下尚造	居住経験有	25
1974年	4巻	4	郡上の一年半	石田陽彦	居住経験有	49
1976年	5・6巻	5	爽涼な風鈴の町	田中保	旅行者	35
1979年	7巻	6	水の声、夜の匂い	わだとしお	旅行者	65
1981年	8巻	7	郡上八幡と私	透乙美	居住経験有	36
		8	郡上八幡に住んで	加藤エミ	居住者	26
1986年	9巻	9	水の匂いとお祭りと	浜いさを	旅行者	26
		10	郡上八幡を荷物の中に	佐々木みづ子	居住経験有	39
		11	終戦間際の郡上八幡	鮎川信夫	居住経験有	33
1991年	10巻	12	私の郡上	松岡武美	旅行者	57

4. 景観要素に着目したテキスト分析

(1) 分析の概要

作品における地域景観の描写を把握するために文章中に登場する景観要素に着目した分析を行う。前述した池田の既往研究²⁾³⁾を踏襲し、景観要素を示す語句の抽出・分類を行った後、テキストマイニングを行うためのフリーソフト「KH coder」を用いて語の共起関係を抽出する。

(2) 景観要素の抽出と分類

a) 景観を表す語句の抽出方法

本研究では、松下文法を基にして語句の抽出を行う。松下文法とは、松下大三郎によって生み出された、日

本初の一般文法であり、体系的口語文法論であると言われている⁷⁾。言語の構造を文章の内容である思念と外的記号の対応という観点から捉え、原辞・詞・断句の三段階によって分析する点に特徴がある。

本分析では、英語の part of speech にあたるとされる「詞」という単位を導入する。詞の区切りは、助詞を目印とし、修飾詞と被修飾詞についてはそれらをまとめてひとつの詞として分析を行い、名詞句を抽出する。抽出の例を以下の図-4 に示す。

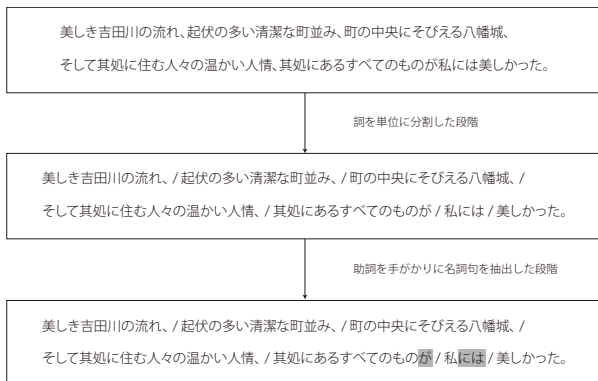


図-4 名詞句抽出の例

図-4 に例示した語句抽出方法によって分析対象作品から語句を抽出した。表-5 に各作品の抽出語句数を示す。

表-5 各作品の名詞句抽出数

作品No.	作品タイトル	抽出要素数(個)
1	一年半	78
2	二つ目のベレー	85
3	二季	42
4	郡上の一年半	161
5	爽涼な風鈴の町	152
6	水の声、夜の匂い	139
7	郡上八幡と私	110
8	郡上八幡に住んで	112
9	水の匂いとお祭りと	153
10	郡上八幡を荷物の中に	106
11	終戦間際の郡上八幡	123
12	私の郡上	120

b) 景観要素の分類

上に示す抽出方法により抽出された語句を、i) 雰囲気規定するもの、ii) 構図を規定するもの、iii) 添景となるものの3つのカテゴリーに従って分類し、各々を22種類の要素に分類した。表-6 に各々の種別について景観を表現した語の集計結果を示す。

作者の属性によらず、多くの作品で共通に出現しているのは山(作品 1,4,5,6,8,10,12)、町(作品 3,5,6,9,10,12)、路地(作品 2,4,5,9)、八幡城(作品 1,4,6,8,9,10)、おもだか家(作品 4,7,8,9,12)、宮ヶ瀬橋(作品 4,9,10,11)といった場の構

図を規定するものに分類されている語である。この結果より、音や匂いなどの瞬間を捉えて表現するものや家的一部分などに着目したものに比べて、自然地理的条件やまちの骨格となるもの、観光対象となるものの方が共通に認識されているという結果が得られた。

おもだか家民芸館は、前述した詩人の水野隆の生家であり、水野隆の父、日本画家の水野柳人が集めてきた民芸品のコレクションが展示されている。水野隆は「連句フェスタ宗祇水」や「水野隆 詩のサロン」などの開催の中心ともなった郡上八幡の文芸の発展に大きく貢献した人物であると考えられる。

また、その一方で「空気」「匂い」「光」といった要素は、筆者属性が旅行者の作品には登場するものの、居住者の作品には登場しない。このことより、居住者に比べて旅行者の方が聴覚のみならず五感を通じてまちを感じ、まちのイメージとして作品に描写していることがわかる。

表-6 景観を表現した語の分類

景観要素	
雰囲気	季節 夏(2,10)、四月(2)、盆(3)、正月(3)、二月(3)、春祭りのころ(3)、九月(3)、十月(3)、秋(3,6,12)、十一月(3)、郡上踊りの時期(5)、冬(10)
	天候 五月雨(3)、小雨(3)、豪雨(6)、雨(6)、霧(10)
	風 微風(6)
	空 中秋の名月(4)、夕雲(5)
	光 残陽(5)、稲光(6)、光の塊(6)、光の渦(6)
	時間 春宵(2)、夜(2,5,6)、暮れてゆく一日(5)、薄明かりの時刻(5)、朝(5,6)、午後(6)、午前(6)
	音 小駄良川のせせらぎ(4)、川のせせらぎ(4)、吉田川のざわめき(5)、虫の音(4)、話声(5)、生活の響き(5)、水の音(6)、雷鳴(6)、下駄の音(8)、唄(9)、お囃子(9)、子供達の声(9)、三味線の音(10)、松簾の音(10)、茶臼が茶臼に触れるかすかな音(10)、導火線の匂い(5)、夜の匂い(6)、水の匂い(9)
	触覚 肉枝玉の舌ざわり(6)
	空気 空気(5)、路りの熱気(9,12)
	川 川(12)、吉田川(3,4,5)、支流(5)、水路(5)、用水(10)、川原(10)、長良川の川面(10)、水底(11)、水の流れ(12)
構図	山 山(1,5,6,8,10,12)、洞泉寺山(4)
	自然(遠い) 緑(1,9)、河原の岩(9)、愛宕の花見(10)
	まち 郡上・八幡・郡上八幡(1,2,3)、日吉町(2)、稲荷町(2,11)、殿町(3)、町(3,5,6,9,10,12)、商店街の通り(5)、愛宕町(7)、新町(7)、常盤町(7,8)
	みち 道路・路(4,5)、おもだか家さんの横に出る路地(2)、路地(4,5,9)、小路(2)、掃り道(7)、裏道(7)、町役場の横(7)、八幡小学校へぬける道(7)、細道(7)、通り(8)、用水沿いの柳の間(10)、四つ辻(6)、紅殻格子の暗い道筋(9)
	眺め 家並み(1,9)、町並み(4)、対岸の家々(5)、町外れの家々(5)、瓦の重なり(9)
	建造物 お城・八幡城(1,4,8,9,10)、八幡小学校(3)、寺(4,5)、大乗寺(4)、横柳寺(6)、最勝寺(9)、願連寺(9)、安養寺(11,12)、おもだか家(4,7,8,9,12)、草石庵(4)、女学生の家(4)、宮ヶ瀬橋(4,9,10,11)、商人宿・旅館(5,6)、町外れの公民館(6)、小暗い部屋(6)、土間(8)、石垣(8)、河原の岩(9)、お茶室(10)、遊童館(12)、家(12)
	その他 郡上踊り(3,6)
	自然(近い) 山菜(3)、庭木の枝の下(7)
	人 新入生たち(3)、女子寮(3)、浴衣の尻(6)、踊る人(6,9)、少女の白く反る指先(6)
	人工物 軒下(1)、野(6,9)、玄関口(1)、毛付け市の名残り夜店(3)、格子戸(4)、千本格子の障子(4)、千本格子の濡れた色(6)、出格子(8)、木戸(4)、宿の番傘(6)、赤いげ碑(8)、城の屋根(9)、提灯(9)、燈(9)
添景	生物 ツバメの巢(1)、コイ(1)、鮎(4)、魚(11)、蜂の巣(6)

(※()内は表5にある作品ナンバーを示す)

(3) 景観要素の分類結果からみる共起関係

a) 分析方法

作品における郡上八幡の描写に対して、景観要素同士の共起関係を分析することで、地域イメージを構成する上で重要な役割を果たす要素を抽出し考察を行う。

分析には、樋口耕一氏が開発したテキストマイニングの為のフリーソフトウェア「KH coder」を用いる。

(2)で抽出した22種類の景観構成要素を用いて、共起関係を分析する。

b) 景観要素の共起関係

「KH coder」を用いて、対象作品全体の 22 種類の景観要素における共起ネットワーク図ならびに、筆者属性別のサブグラフ検出を用いた共起ネットワーク図を作成した。結果を以下の図-5・図-6・図-7 に示す。

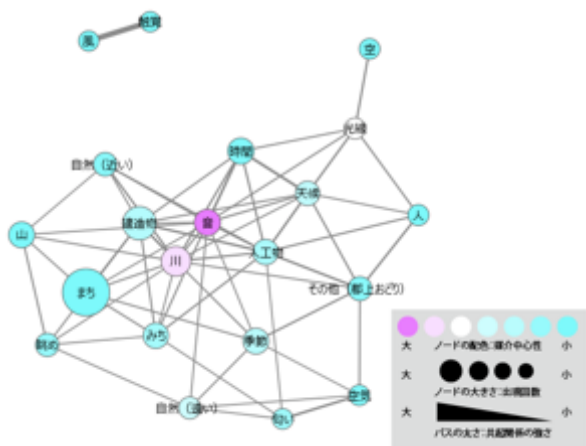


図-5 景観要素の共起ネットワーク図（作品 No. 1～No. 12）

共起ネットワーク分析の結果より、音の要素の媒介中心性が高いことがわかる。このことから、八幡町の景観は、音を表現する語を中心として多くの景観要素が付置されていることがわかる。

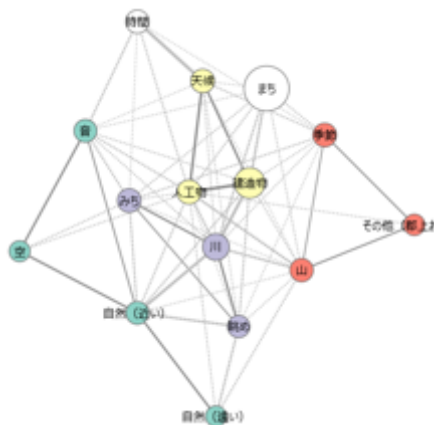


図-6 景観要素の共起ネットワーク図サブグラフ検出（居住者）

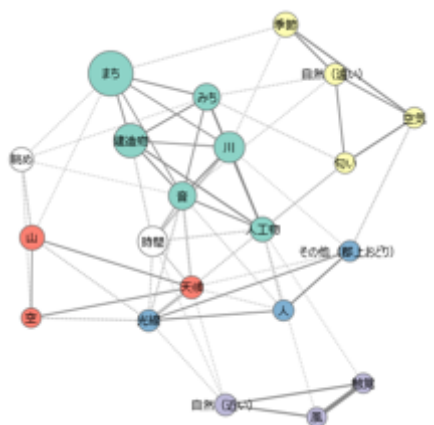


図-7 景観要素の共起ネットワーク図サブグラフ検出（旅行者）

図-6・図-7には、筆者の属性別のサブグラフ検出を用いた共起ネットワーク図を示している。サブグラフ検出とは、相対的に強く結びついている語同士をグループに分ける方法である。

サブグラフ検出の結果より、要素のグループ数の差異を見ると居住者が4グループであるのに対して、旅行者が5グループである。また、居住者の1グループにおける要素数が平均して約3個であるのに対して、旅行者のグループの中には、突出して1グループに6個の要素を持つグループがある。そのグループをみると、まちの要素に対してみちや川、建造物などがグルーピングされており、旅行者の方が八幡町を認識する際に、八幡町を大枠で捉えていることがわかる。

5. 景観を表現する語の特徴と考察

(1) 構図を規定する語についての考察

本章では、景観を表現する語の中から地域イメージの認識として特徴的と思われる語の具体的内容について考察する。まず場の構図を規定する語の中でも頻出する「みち」に分類される語の文章内での表現に着目し、抽出したテキストを表-7 に示す。

居住経験者と旅行者での描写の違いをみると、居住経験者の作品に出現するみちの表現には、みちの説明が細かく、過去の経験との密接なつながりから、居住者はまちを、通りを中心として認識していると考えられる。

また、図-8・図-9 に抽出された景観要素から位置の読み取りが可能なものを居住者・旅行者別に位置図におとした。旅行者が認識している景観要素が点的なものであるのに対して、居住者が認識している景観要素が通りなどの線的なものであることがわかる。

表-7 「みち」に分類される語の文章内での表現抽出

作品No.	筆者属性	テキスト内容
2	居住者	“日吉町から稲荷町を抜けて、 “おもだか家”さんの横にでる露地 。夏でもなんとなくひんやりするこの 小路 が私は好きだ。（中略）それから十年たつて、この 小路 を毎日通ることになろうとは思ってもみなかった。三年になるまでは、夜ともなるとこの 小路 ばかりではない。八幡町のそこ、この 小路 が、まるで幼なじみのように思えてくるから不思議である。雪の夜よし、春宵よし、夏またよし、 静かな小路 を背景に、親しい人と酒を食べ、知らない人と酒を飲む。都上八幡とは酒徒にとってまさにニクイところである。”
4	居住者	“このおもだか家から南へ数軒行ったことが草石庵である。木戸を開け、 うす暗い路 をしばらく進むと急に明るく家庭へ出る。そこが草石庵であった。この 路地 を通る時、いつも私の耳にはバッハの短調トッカータが流れて来るような気がした。”
7	居住者	“「おもだか家」のある新町から、愛宕町の下宿先までの 寄り道 によく通る、とても すてきな裏道 がありました。町役場の横から常盤町を通って、 八幡小学校前へ抜ける道 で、小さな川沿いにある人ひとりしか通れないくらいに 細道 でした。家々の板塀からのびている庭木の枝の下を、腰をかかめてぐったりしながら帰ったものです。”
10	居住者	“津和野に似てはいるのですが、 用水沿いの柳の間 を歩くと、かすかに聞えてくる三味線の音。通りを隔てたお茶室からは、松籟の音とともにお手前の茶筌が茶碗に触れるかすかな音。”
5	旅行者	“また八幡は、 閑静な路地 が多く交差する町であり、その 路地の美しさ には驚嘆するものがある。その 路地の清潔さ は、一際僕には印象深く、その情景は如何にも、城下町特有の落ち着いた風情であり、千年の古都と呼ぶに相応しい趣であった。（中略）歩いていても、不可解なほど寺が多く、家々の玄関がそのまま 路地 と接し、 道路 にびったりと接しているので、余り塀とか周壁の見当たらぬ町である。”
6	旅行者	“雨は何時しか過ぎて、ずぶ濡れの 四つ辻 に立つと、町はまるで冷たい水底のような沈黙と静寂の中に漂っていた。”
9	旅行者	“祭りの気分は実は準備中からいわれる宵宮にいたあたりが良い。軒に提灯が下げられ、子供達のはしゃぐ声が 路地 に走り抜けて程よい緊張感が 街路 に満ちて来るそんな時間が私は好きだ。（中略）南の方へ下って最勝寺、願連寺あたりを行くと、遠くなった通りの熱気が 紅菱格子の暗い道 にも流れ込んでいて、水の匂いがし、住む人の息遣いがあり、恵まれた自然に彩色されてきた人達の生活が通りの延長線上に見えたように思った。”



図-8 景観要素の位置図(居住者)



図-9 景観要素の位置図(旅行者)

(2) 雰囲気の規定する語についての考察

次に雰囲気を規定するものというカテゴリーに分類される語の中では、音や匂い、触感、空気など五感に関する描写が多くみられた。それらの語をさらに分類すると、川や水に関する描写、おどりに関する描写、子供の声や町からにじみだす生活音など生活に関する描写、その他の描写というように大きく 4 つに分けることができる。「水と踊りの町 郡上八幡」というキャッチフレーズに沿った地域イメージが、五感を通じて人々に認識されていることがわかる。

(3) 場の添景となる語についての考察

場の添景となるものの中では、格子戸や出格子、千本格子など町家を想起させるものが出現している。また、前出した「みち」という種別に入っているが、作品 9 の中にも紅殻格子といった町家を想起させる表現がある。語に着目し抽出したテキストを表-8 に示す。

郡上八幡では、吉田川を挟んで北側にある通称「北町」が「郡上八幡北町伝統的建造物群保存地区」として 2012 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されるなど、城下町・侍町の面影を残す連続性をもった北町の家並みの保全が住民・町役場を挙げて進んでいる。北町のこの活動は、1984 年の街並み調査をきっかけとして自らの町に大正・昭和初期の建物が多く残さ

れていることを地域住民が自覚し、1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて柳町・鍛冶屋町・職人町での町並み保存会を組織し、20 年以上の歳月をかけて現在の町並みが形成され、伝建地区指定に至った。

今回、場の構図として抽出した語の中にも「家並み」(1,9 巻)や「町並み」(4 巻)「家々」(5 巻)といった語が出現している。「郷土文化誌 郡上」の主たる刊行時期は表-1 に示すように 1980 年代以前であり、町並保存や整備活動が始まる以前であるが、文芸の中にはすでに意識されていたことがわかった。

これに対して、場の添景として抽出された語が示す位置は、郡上八幡の中でも吉田川を挟んで南側の通称「南町」と呼ばれる地域であり、格子戸や出格子など町家を連想させる語句が頻出している。南町では多種類の建物が混在しており、連続した家並みとしてまとまりをもって認識しづらく、人目につきやすい風情のある町家の細かな部分が強調して描写されたものと考えられる。

表-8 「格子」等に分類される語の文章内での表現抽出

作品No.	筆者属性	テキスト内容
4	居住者	“音楽談義の中で、「おもだか家さんへ行ってみられるといいですよ」といわれ、数日後仕事で新町のその家に入って行った。格子戸をあけた時、そこに何か現代と遠くかけ離れたある世界の懐かしい匂いがあるようであった。千本格子の障子をあけておもむろに出てこられた当主水野隆先生はどこかシュールな想をさせた。”
6	旅行者	夜が更けた。雨は何時しか過ぎて、ずぶ濡れの四つ辻に立つと、町はまるで冷たい水底のような沈黙と静寂の中に漂っていた。再び帰ってくるあの水の声。夜の匂い。千本格子の濡れた色に手を触れて、その奥の小暗い部屋の中に踊り疲れて眠っているのであろうか？白い指の少女のことをふと思った。
8	居住者	常盤町には、踊りやお茶のお師匠さんが住んでらっしゃって、時代劇などで見る下町の情緒が漂う上に、出格子は落着きを一層感じます。
9	旅行者	南の方へ下って最勝寺、願連寺あたりを行くと、遠くなった踊りの熱気が紅殻格子の暗い道筋にも流れ込んでいて、水の匂いがし、住む人の息遣いがあり、恵まれた自然に彩色されてきた人達の生活が踊りの延長線上に見えたように思った。

6. まとめ

本研究では、郷土誌というテキストデータを用いて、i)郷土誌のコンテンツのカテゴリーを分類し、ii)景観要素の抽出や抽出された要素の文脈での扱われ方を読み取ることで地域イメージの特徴を把握することを試みた。得られた成果は以下の通りである。

- ① 郡上八幡では、詩や短歌、俳句といった文化が円熟しており、大寄席や連句会を頻繁に開催するようなコミュニティが町内で多層的に形成されている。また、八幡町だけではなく、近隣の白鳥町や大和村でも文芸文化が発達し、郡上市全体としての文化活動の状況を把握することができた。
- ② 随筆作品のテキスト分析から、共通して出現する景観構成要素となる語句として、山・路地・八幡城・おもだか家・宮ヶ瀬を得ることができ、これらは郡上八幡の地域イメージを構成する要素であると考えられる。また、これらの語は、まちの枠

組みを決める地理的条件やまちの骨格となるもの、観光対象となるような場の構図になるものであることが明らかとなった。

- ③ 抽出された景観要素を文脈レベルで読み取ることにより、居住者は通りを中心として認識している傾向があるのに対して、旅行者が認識している景観要素はポイント毎の点的なものであり、主体の属性によってまちの認識のされ方が異なる。
- ④ 五感に関する描写では、川や水に関する描写、踊りに関する描写、子供の声や町からにじみだす生活音など生活に関する描写、その他の描写というように大きく4つに分けることができ、「水と踊りの町 郡上八幡」というキャッチフレーズに沿った地域イメージが、五感を通じて人々に認識されている。
- ⑤ 郡上八幡の北町と南町といった特徴の異なる地区の違いが、テキストから抽出された景観構成要素となる語の違いとしても現れていることが確認できた。

以上のように、地域イメージの特色の把握に際して、郷土誌という媒体は、多面的な分析が可能であることを示すことができた。

謝辞：本研究では「郷土文化誌 郡上」編集長のご子息である谷沢周作様、編集委員にも携わっておられた古池五十鈴様の御助力を頂きました。心からの謝意を示します。

参考文献

- 1) 中村良夫：『都市をつくる風景』藤原書店、2010
- 2) 池田朋子・大貝彰：文学作品中の空間描写に対する都市景観に関する研究-高山のケーススタディー-日本都市計画学会学術研究論文集、pp583-588、1993
- 3) 池田朋子・大貝彰：高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究-文レベルの分析を通じて-日本都市計画学会学術研究論文集、pp601-606、1994
- 4) 吉本憲生・篠野志郎・藤田康仁・守田正志・山田卓矢：郷土誌『上方』にみる昭和初期の大阪における都市像に含意された歴史性 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、pp583-584、2011
- 5) 尾野薫・星野裕司・山下雄史：『苦海浄土』における暮らしの心象風景 景観・デザイン研究講演集 No.7、pp126-135、2011
- 6) 尾野薫・星野裕司・増山晃太：生活史から読み解く生活風景に関する一考察 景観・デザイン研究講演集 No.8、pp132-140、2010
- 7) 徳田正信：『図説松下文法ハンドブック—一般理論文法の先駆—』、勉誠出版、2006

A STUDY TO ANALYZE THE REGIONAL IMAGE BASED ON KYODOSHI (MAGAZINE OF THE CHRONICLE OF LOCAL HISTORY AND CULTURE) —A REVIEW OF “KYODO BUNKASHI GUJO”—

Yuka HASHIMOTO, Yoh SASAKI

It is believed that Kyodoshi (a magazine of the chronicle of local history and culture) which is the compilation regarding the local history of specific area reflects local characteristics and the area image recognized by local community. Therefore, based on analysis of the Kyodoshi, the classification and mode of the regional image recognized by local community can be interpreted.

In this study, 10 series of “Kyodobunkashi Gujo” published by local community in Gujo Hachiman-cho, Gifu Prefecture were analyzed. As the main results are as follows: published contents reflects the cultural activities in the region, the text analysis of essays shows the characteristics of visual image elements recognized residents and visitors that also reflects the townscape of the districts.